

ヘッベルの『ユーディット』について

清 水 純 夫

1

1839年、ヘッベルは聖書外典のユーディットを主人公にした戯曲『ユーディット』を書いた。彼はこの『ユーディット』について次のように日記に書いている。

「私の悲劇全体は次のことに基づいています。つまり異常な世界状況下では神がじかに出来事の進行に介入し、恐るべき行為を自分の衝動からでは決してしないであろう人々に遂行させることです」⁽¹⁾。

このヘッベルの思想に基づいて、従来からユーディットの悲劇は以下の2点にあると指摘してきた。その1つは、ユーディットは神の使命に従ってホロフェルネスを殺害するが、殺害の瞬間にはユーディットは「全自我が混乱し」⁽²⁾、神を失念しており、ただ「正しいことを正しくない理由から行った」⁽³⁾ゆえに罪の意識に苛まれるのだ、というものである。神の使命を盲目的に忠実に実行し、罪の意識を全く抱かないばかりか功績と思う聖書外典のユーディットに対するヘッベルの、「聖書のユーディットを私は利用することができません。そこではユーディットはホロフェルネスを策略と狡猾さで罠に誘い込む未亡人なのです。彼女は彼の首を袋に入れた時には喜び、イスラエルの全ての人々の前で、そしてともに3ヵ月もの間、歌い、歓声をあげるのであります。それは卑劣です。」⁽⁴⁾という日記の発言にみられる嫌悪感や、同じくユーディットを「狂信的でずる賢い怪物」⁽⁵⁾ときめつけるヘッベルの言葉もそれを裏付けている。

もう1つは、神の要請でホロフェルネスを殺害してもそれは「自然の永遠の秩序」⁽⁶⁾に反する行為であり、神はその人間を救えないばかりか罰しなければならないという、神と自然の秩序の二元論の板挟みがユーディットの悲劇だというものである。

しかし筆者にはユーディットの悲劇の真の原因是上記の2つ以外のもっと別のところにあるように思われる。しかもそれはホロフェルネスにも共通するところがあると思われる所以、以下、両者について考察してみよう。

2

ヘッベルは日記の中で次のように言っている。

「ユーディットとホロフェルネスは〔・・・〕真に個性的な人間ですが、同時に彼らの民族の代表者でもあります。ユーディットはユダヤ教徒の、即ち神そのものと個人的な関係にあると信じたかの民族の目の眩むような頂点です。ホロフェルネスは襲いかかる異教徒です〔・・・〕」⁽⁷⁾。

のことから、ユーディットもホロフェルネスもヘッベルの、時代に規定された問題関心とテーマに沿って造られた存在であると同時に、彼らがユダヤ教の時代を舞台に活動している以上、彼らもユダヤ教の時代に規定された存在であることを免れえず、そのための時代考証を無視することはできないとヘッベルが考えていることがわかる。要するにユーディットとホロフェルネスは紀元前の人間の人格・性格とヘッベルの時代の人間の人格・性格が統合された存在だということである。

それゆえ我々はユーディットとホロフェルネスをまずユダヤ教の時代背景において規定することから出発しようと思う。

作品舞台の時代の最も大きな特徴は一神教のユダヤ教と多神教の異教の対立である。とくにユダヤ教においては、「神そのものと個人的な関係にあると信じたかの民族」とあるように、神は実在し、その神との交わりは可能だと信じられていた。それが作品では予言者ダニエルの「もし汝ら我を見捨てることなくば、我汝らのもとにとどまり、汝らを見捨てることなし」⁽⁸⁾という発言を見てとれるし、実際、神は「海は裂け、海水は両側に壁のようにしっかりと立つた」⁽⁹⁾や、「強情なヨーナス」をレヴィアタンに呑み込ませ、「懺悔をする」や「再びレヴィアタンの腹から彼を助け出した」⁽¹⁰⁾という奇跡をおこして民を救ったとされているのである。

さらにこの神は「人々は触れることすら禁じられている聖なる生贋を食べようとしています」⁽¹¹⁾とのユーディットの言葉からわかるように、神への生贋を食べることを死をもって禁ずる神であり、神の律法に絶対服従を求める神である。

聖書外典のユーディットも作品のユーディットもユダヤ教の神についてのこうした考え方を全て信じる非常に敬虔な女性であり、神に疑問を抱く人々に向かって神を試してはならないと戒める⁽¹²⁾。

しかも作品のユーディットは神に個人的に親しみを抱いてもいる。ユーディットは侍女に次のように自分のみた夢の話をする。

「突然、私は足元から2、3歩先のところに、真っ暗で、視界のきかない、もやと霧に包まれた深淵があるのに気がつきました。戻ることもじっとしていることもできず、前方へよろめきました。不安に駆られて『神様！神様！』と叫ぶと、『私はここにいる』と奈落の底からやさしげに甘美に声が聞こえてきました。私が飛び込むと、柔らかな腕が私を受けとめてくれました。見たこともない人の胸に安らうように思いましたが、何ともいえずいい気持ちでした。けれども神様は重すぎる私を支えていることができず、私はだんだん沈んでいきました〔・・・〕」⁽¹³⁾。

このようにユーディットは神に抱かれることを憧れるまでに神に帰依する女性として描かれている。

しかも彼女の対象は容易に神から、神のような絶対者・英雄に移行しうる。なぜならユーディットの憧憬の背景には彼女の置かれた「処女でも女でもない（＝未亡人にして処女——訳者注）」⁽¹⁴⁾という極めて特異な状況があり、これがユーディットをして女としての充たされない、空しい、無価値な存在からの脱出を求めさすからである。侍女に語るユーディットの「女は無価値なもの(nichts)です。ただ男によってのみ女はひとかどのもの(etwas)になることができるのです。男によって母になることができます。」⁽¹⁵⁾という台詞はこうしたユーディットの気持ちを裏付けている。

こうして神への憧れは、英雄が登場すれば直ちにその英雄への憧れに、しかも多分に性的な要素を伴った憧れに変わる。これはもちろんユーディットには意識されない。だが、この潜在的な願望はホロフェルネスの偉大さを耳にした時に思わずユーディットの口をついて出る「その男に会ってみたい！」⁽¹⁶⁾という言葉にはっきり現れる。意識では、神に！というつもりでも、無意識では、ホロフェルネスに！なのである。つい口をついて出た言葉にユーディット自身びっくりして直ちに抑圧するが、この願望は彼女の潜在意識の中では生き続ける。

そして「その男に会ってみたい」が自己の中で合理化され、正当化されたのが、ホロフェルネス殺害のために彼に会いに行くのは神の神託によるものだという解釈である。実際に神が登場して神託を告げるのではなく、あくまでユーディットの勝手な解釈という形をとっている点が微妙なところであるが⁽¹⁷⁾。

しかも本気で神の使命を信じるユーディットにとって、意識されたホロフェルネス殺害の使命と、ホロフェルネスに会いたい、身を捧げたい、という無意識の願望は、ホロフェルネスを誘惑し、身を任せ、しかるのちに油断したホロフェルネスを殺害することによって充たされうことから、神を引き合いにだせる今の時点では「不浄なものも清浄なものになる」⁽¹⁸⁾と予め自分の行為を免罪することも可能なのである。

このように意識のレベルでは作品のユーディットは、聖書外典のユーディットと同じように、神に対する絶対的服従・非主体性において際立っており、聖書外典のユーディット像の大枠は守られている。しかし無意識のレベルでは作品のユーディットは紛れもなくヘッベルの時代の人間であることが、即ち神に対して主体性をもった女性であり、神への依存が他者への依存に移りうる状態にある女性だということがわかる。

こうしてホロフェルネスに会ったユーディットはまずなによりも民の許しを求める。これは聖書外典には無い行為である。当然のことながらホロフェルネスは拒否する。すると一転して

ユーディットは今度はホロフェルネスに、神のお供えを食べたかどで民の皆殺しを求める。

「彼らを皆殺しにして下さい。このことを主である私の神が私の口を通してあなたに命じているのです」⁽¹⁹⁾。

この場面は聖書外典にもある。但し、そこでは「彼らがそれ（お供えを食べること——訳者注）を実行に移したあかつきには、彼らはその同じ日に、あなたの手に委ねられて滅びるのです。」⁽²⁰⁾とあるように、神がホロフェルネスを介して殺させるいわば予言となっている。それに対し作品では、ユーディットはホロフェルネスに直接殺すように訴えているのであり、これは予言ではなく、ホロフェルネスに対するユーディットの要求なのである。その点が決定的に違う。

作品のユーディットにとってこの皆殺しの要求は決して本心ではなく、あくまで戦術的な偽装のつもりであろうが、しかし実は彼女の本心なのである。つまりユーディットの中では神からホロフェルネスに比重が移りつつあるのである。そのため神と民は次第に彼女の念頭から消えていく。これは神と民への裏切りに他ならない。なぜなら民を救うためのお芝居ではなく、本当に民を殺すことを求めているのは神の使命に全く背く行為で、神への大罪だからである。もともとホロフェルネスに会いたいという無意識の衝動に駆られてユーディットはここへ来たわけだから、民は初めから二の次の存在、即ちホロフェルネスとの関係如何ではどうとでもなる存在なのである⁽²¹⁾。しかしユーディットはそのことに気がつかない。ここにユーディットの民衆蔑視、神に対する敬虔さの欠如、がみてとれる。

とくに民に対するユーディットの蔑視は、結末でユーディットが口にする「私は、（民の1人に）お前が安心して羊に草を食べさせられるように、（別の人）お前がキャベツを植えられるように、（さらに別の人）お前が手仕事をし、お前に似た子供を産むことができるよう、天下一の男を殺したのです。」⁽²²⁾という台詞や、ユーディットによるホロフェルネス殺害で敵が大混乱に陥っている今になってやっと敵めがけて突進しようとする民に対して、ユーディットの叫ぶ「あれは屠殺者の勇気だ」⁽²³⁾という民を軽蔑しきった台詞に端的に認められる。

ユーディットは全体のために個を犠牲にするよりも、個の方を全体よりも優先するエゴイストなのである。彼女は民の犠牲の上に自分の幸福を追求しようとする。それが彼女の態度から滲み出てくる。だから、「（ユーディットに先ほどより驚きと嫌悪を態度で示していたが）呪われた方だ！あなたは御自分の民を裏切るためにやって来たのですか？」⁽²⁴⁾と言う侍女の驚きは当然のことである。

この点が聖書外典とは大きく異なる。以後作品は聖書外典からは離れ、ヘッベルの時代の人間性を一層色濃く反映するようになる。その証拠にユーディットは自分に存在の意味・価値を与えてくれるホロフェルネスへの傾斜をますます強める。ホロフェルネスがユーディットの神にとってかわろうとする。

「あなたは私と私の神の間に割り込んでくる！」⁽²⁵⁾

だからホロフェルネスがユーディットをものではなく人間として認めたならば⁽²⁶⁾、ユーディットは完全にホロフェルネスに惚れ、民を裏切り、使命を放棄したと思われる⁽²⁷⁾。

ユーディットは自分を尊重するように必死で訴える。

「女を尊重するようにおなりなさい！」⁽²⁸⁾

「あなたは最もひどい屈辱の中に最高の幸福を感じるような女どもしか知らないのです」⁽²⁹⁾。

しかしユーディットの訴えも功を奏さない。それゆえ、ユーディットはホロフェルネスに辱められ、期待を裏切られたため、恨みという全く個人的な動機から復讐し、ホロフェルネス殺害に及ぶ。聖書外典では、「彼はわたしに対して罪を犯してわたしを汚したり恥ずかしめたりすることはできませんでした」⁽³⁰⁾とあるように、ユーディットの貞操は守られる。しかし作品では貞操は奪われてしまう。しかも処女であったがゆえにユーディットの恨みは深く、復讐の炎は激しく燃え上がる。

「私は私の人間性への粗暴な侵害に対して復讐するのだ」⁽³¹⁾。

「尊厳を傷つけられた私は存在の権利を喪失した。この剣で私は再びそれを奪い取ろうと思うのだ」⁽³²⁾。

「私は虫けらではない」⁽³³⁾。

これらの引用からわかるように、ホロフェルネス殺害はもはや神の使命としての殺害ではなく、全く個人的な怨恨による殺害なのである。それは単なる殺人にすぎず、神を忘れていた点では神に対する裏切り行為であり、それゆえ「不浄」なままである。

このようにユーディットは個人的怨念で殺人まで犯したが、これは潜在的には当初からユーディットが民や神を裏切ってきた必然的な帰結なのである。神の使命遂行としての殺害ではなく、逆上し、復讐のためにホロフェルネスを殺害するという動機の混乱も起こるべくして起こったことで、確かにこのユーディットは聖書外典のユーディットのように殺害を動機の混乱なしに行う「狂信的でずる賢い怪物」ではないが、他方、神と民への裏切りに端を発している以上、聖書外典のユーディットより罪は深く、彼女の免罪は不可能である。

神と関係の無い殺人という罪と、神と民を裏切ってきた罪という二重の罪から、ユーディットには神との和解の可能性は全く無い。

さらにユーディットは、「男どもを産むのが女のつとめ。決して男どもを殺してはならない。」⁽³⁴⁾という「自然の永遠の秩序」に反する罪をも犯している。

こうして三重の罪からユーディットは絶望に捕らわれ、神との和解が有り得ない以上妊娠をも恐れざるをえず、その時には民に自分を殺すように頼むところまで追い詰められていく。

ヘッベルは「罪による誕生が罪による死を条件づけている」⁽³⁵⁾と述べている。人間はいかにもがこうとも罪による死が避けられないというのがヘッベルの考え方である。聖書外典のユーディットとは対照的に、犯した罪におののき、絶望することが人間らしさなのである。

ところで、ヘッベルは神と自然の秩序の関係について次のように日記に書いている。

「神が偉大な目的を達成するために個人に直接働きかけ、そのことによって世界の営みに〔・・・〕恣意的な介入を敢えてする時、人間が一瞬止めたり方向を変えたりするその同じ車輪によって神の道具たるその人間が押し潰されるのを神自身も防ぐことができない。〔・・・〕。この理念を反映した悲劇は、神自身もそれを妨げれば償わざるをえない自然の永遠の秩序をみせることによって大きな印象をもたらすであろう」⁽³⁶⁾。

だが、既にみてきたようにユーディットの行為は神にも自然にも逆らう罪深いものであるから、冒頭であげた神と自然の秩序の二元論の板挟みにユーディットが苦しむことはない。ユーディットはあれかこれかの選択に苦しむのではなく、両方の罪を犯したことによるのである。だからもしヘッベルが神と自然の秩序の二元論ゆえの悲劇を描こうとしたのなら、この作品は作者の意図を描きえなかった点では失敗作と言わざるをえない。

こうして三重の罪に苦悩するユーディット像が浮かび上がってきたが、しかし果たして本当に彼女の行為は罪といえるのか。もし罪であるならば、その本質とは何かを改めて検討してみよう。

まず、ユーディットの場合、殺人も名誉剝奪や人間としての尊厳剝奪に起因し、しかも自立した決断に基づくものだから、その行為は正当なもの、即ち一種の決闘或いは正当防衛とみなすべきものではなかろうか。しかもホロフェルネス軍に町を包囲され、皆殺しの危機にさらされた戦闘状態の中で敵の大将の首を取ったわけだから、手柄として賞賛されこそすれ罪として非難されるべきではないであろう。むしろ女性の戦う権利を認めず、女性の人権を軽視したり無視したりする当時のモラル観のほうが問題なのである。だから、個人的怨念だけがクローズアップされてはいるが、その底を正当性が貫いている限り罪ある殺人とは言えず、それゆえ神の免罪も必要とはしない。つまり、たとえ神を忘れていてもユーディットの行為が犯罪ではない以上、本来彼女には神に対する罪はないと言うべきであろう。

次に、自然の秩序についてであるが、これは女性に社会的進出を認めず、家庭に押し込めようとする保守的倫理観が反映されたものに他ならない。女性も社会に進出し、能力を發揮し、他者依存によらずとも自分の存在意味と価値を味わえる状態にあるべきで、上述のようなユーディットの行為を認めない秩序を自然とみるほうが間違っている。だからユーディットには自然に対する罪もないということになる。

こうみるとユーディットの悲劇はまさにヘッベルの時代の女性の悲劇であって、ユーディットの悲劇も時代の悲劇というべきものである。自立した女性を認めようとせず、葬り去ろうとする社会が悪いのであって、ユーディットの行為は上記の点だけに限定するならば免罪可能なのである。

それにもかかわらず、自分の幸福のために民衆を犠牲にするユーディットの利己的な愛は断じて容認できないものである。このエゴイズム・反ヒューマニズムがユーディットの真の罪であり、破滅の原因なのである。作品のユーディットは聖書外典のユーディット以下の人格であ

り、そこに物心両面でヘッベルに獻身的につくすエリーゼの愛情を冷やかに受け取る彼の態度に典型的にみられるヘッベルの女性蔑視が反映してしまったのである。

4

ホロフェルネスについてはどうであろうか。キリスト教以前の異教・多神教の時代の代表者がアッシリアの大王ネブカドネザルと將軍ホロフェルネスである。彼らは聖書外典にも作品にも登場する。聖書外典、作品ともネブカドネザルは自分を神として礼拝することを要求している。しかしホロフェルネスは聖書外典ではネブカドネザルの忠実な臣下であり、作品にみられるような強烈な自我の主張はない。作品のホロフェルネスは聖書外典のホロフェルネスとは大きく異なっているのである。

作品のホロフェルネスはまず「自分がどこから来たのか知らぬがこれは何より嬉しいことだ。悪餓鬼の頃、獵師が俺をライオンの穴から拾い上げた。ライオンが俺に乳をくれたのだ」⁽³⁷⁾という生まれ方により、神話の英雄にも譬えられるものとなっている。

さらに「生贊をお前たち皆が知っており、しかも知っておらぬ神に供えよ。[・・・]。それが俺の最も敬う神だ。」⁽³⁸⁾という台詞から、ホロフェルネスが自分を神と同等或いはそれ以上の存在であると考えていることがわかる。

こうしてホロフェルネスはネブカドネザルよりも秀れた英雄であることが強調される。実際、彼の言動にはネブカドネザルに対する軽蔑が滲み出ている。

「俺は彼のために世界を征服するつもりだ。そしてもし彼が世界を手に入れたならば、再び彼から世界を奪い取ってやろう」⁽³⁹⁾。

また自分以外に神々が崇められてはならないと命ずるネブカドネザルに対しては、ホロフェルネスは「ネブカドネザルに呪いあれ！とんでもないことを考えついた彼に呪いあれ！それを彼は自分では成し遂げることもできず、ただ台無しにし、茶化すだけなのだ。」⁽⁴⁰⁾と嘲る。ホロフェルネスがネブカドネザルを問題にもしていないことがわかる⁽⁴¹⁾。

力を絶対視し、信奉するホロフェルネスは世界に対する憎悪から破壊を繰り返す。

「より良きものが到来できるようにと世界を破壊するために俺は生まれてきたような気がする」⁽⁴²⁾。

いくらホロフェルネスが「彼から世界を奪い取ってやろう」と思っても、その成功の可能性は未知であり、少なくとも当分は自分の軽蔑する、そして信用していない、ネブカドネザルの臣下に甘んじなければならない。

「ネブカドネザルは俺の兄弟だろうか。彼が俺の主人であるのは全く確かなことだ。もしかしたら彼は俺の頭をいつか犬どもに投げ与えるかもしれない。[・・・]。ひょっとしたら俺がいつか彼の内臓をアッシリアの虎どもに食わせるかもしれない」⁽⁴³⁾。

このように2人は互いに全く信用していない。そして心ならずもネブカドネザルの臣下であることからくる怒りがホロフェルネスの残虐な破壊行為の源であり⁽⁴⁴⁾、この怒りは不条理な運命とそれを容認する世界に向けられる。こうしてホロフェルネスは自分自身のいわば破壊の衝動から容赦なく破壊を行う。ここにホロフェルネスのサディスト的な破壊の衝動を認めることができる。

しかしその一方でホロフェルネスはすでに絶対者の空しさを感じてもいる。

「自分以外に崇めることができないとは侘しいことだ」⁽⁴⁵⁾。

孤独、空しさ、果てし無い闘いからの解放、心の安らぎをホロフェルネスは求めている。そのためにも彼は一刻も早く自分に匹敵する英雄が現れて、自分を倒し、自分を空しさから解放してくれることを願う。

「せめて俺に逆らう敵が1人でもいてくれたらなあ。俺はそいつにキスをしてやろう。そして激しい闘いの後、そいつを倒したら、その上に俺も倒れこみ、一緒に死んでやろう」⁽⁴⁶⁾。

「俺は俺に反抗しようとする民を尊敬する。だが俺が尊敬するものを全て滅ぼさなければならないとは残念なことだ」⁽⁴⁷⁾。

しかし現実にはホロフェルネスの期待に応えうるような英雄はもちろんのこと、彼に歯向かう勇気のある者すらない。だから弱者であってもホロフェルネスに反抗する勇気があれば、ホロフェルネスはその者を自分の命を投げ出すに値する英雄とみなそうとする。しかしその願いも空しくそんな男は現れないため、英雄登場に寄せるホロフェルネスの願望はついにマゾヒスト的な自己破壊の衝動にまでエスカレートする。

このように自分をも世界をも破壊しようとするホロフェルネスの異常な人格は人間関係にも反映せざるをえない。

兵士に隊長を訴えさせ、しかも隊長と並んで訴えた当の兵士をも殺させたり、或いは、気をきかして命令される前にすでにラクダに手綱をつけておいた兵士を、自分の考えを先取りするとはけしからんと激怒し、叱りつけるホロフェルネスの不可解な行為は、彼自身「これが自分を理解させないための、永遠の謎にしておくための技だ」⁽⁴⁸⁾と述べているように、極めて計算されつくした行為なのである⁽⁴⁹⁾。

つまりホロフェルネスは自分の行動パターンにおける法則性を拒否することで、自分を謎めいた存在にしようとする。これは他人と同じ思考を拒否する点では他人との連帯の拒否であり、ヒューマニズムの拒否である。ホロフェルネスは絶対的な孤独に陥り、人間不信・人間蔑視が生ずる。実際ホロフェルネスは自分に匹敵しない人間や真の英雄でない者を軽蔑する。

ホロフェルネスが人間をものとみなしていることは端的にそのことを物語っている。彼は自分以外の人間・弱者を全てものとして見下す。相手から人間の尊厳を剥奪するホロフェルネスの言動は女性に対する侮辱において頂点に達する。先に引用した、「あなたは最もひどい屈辱の中に最高の幸福を感じるような女どもしか知らないのです」とユーディットに言わせるホロ

フェルネスの女性に対する態度はその最もよい例であろう。この点では I. Sadger も「ホロフェルネスにとっては彼を嫌う女性を征服することが唯一の刺激なのである」⁽⁵⁰⁾と指摘している。このように人間をもの、言い換れば手段に貶めることについてヘッベルは次のように述べている。

「人間を単なる手段に貶めることは最悪の罪である」⁽⁵¹⁾。

女性に対する侮辱が結局ユーディットの復讐を誘発する。いわばホロフェルネスはユーディットを手段に貶めた罪を死でもって償わされるのである。ユーディットは愛する男を侮辱ゆえに殺害する。寝ているホロフェルネスの首を彼の剣で切り落とすのである。

しかしいかにもホロフェルネスの最後は不自然である。油断しきっているのである。ユーディットにわざと自分を殺させたとすら思わせるものである。真偽のほどは不明だが、いずれにしても死ぬことでホロフェルネスは空しさから解放されたことだけは確かである。

5

ところで、このような孤独な絶対者・英雄はヘッベルや彼の同時代人にとってどのような意味をもっていたのであろうか。

19世紀になり本格的に資本主義化がすすむにつれ、手工業者や農民の昔ながらの共同体は崩壊の一途を辿る。その構成員はもはやそこに安住することはできず、そこから閉め出される。かわって大学で学んだ教養市民層・中間層の進出が強まる。身分の低い者も能力があれば出世が可能となる。

ヘッベルも大学で勉強し、詩人・作家として世に認められたいと願う。しかし皆が皆認められるわけではない。貧困のどん底で喘ぐヘッベルはそこからの脱出を求めて必死にもがくが、なかなか状況は好転しない。自分の能力への絶対的自信と強烈な自我意識、並びに正当に評価されず、自分に相応しい地位が与えられないという屈折した感情、これがホロフェルネス像と重なる。それは又能力に相応しい評価と地位が与えられない同時代の若き知識人の意識をも代弁している。だからこそ『ユーディット』は当初から好評を博すことができたのであろう。

しかしヘッベルのように不満を抱く人々は往々にして排他的な競争に駆られ、相手の人格を無視し、もの・手段とみなすようになる。即ち人間不信に陥る。それは容易に自分を疎外する社会・世界への攻撃性に転化しうる。彼にとってもはやゲーテの古典主義的調和と美は手本とならない。彼は『ヴィルヘルム・マイスター』の「塔の結社」にみられた全階級・階層との協調路線を拒否する。つまりホロフェルネスにみられたように團結を拒否し、孤立した道を歩む。しかし階級対立は存在し、ますます激しさを増す。このようにみてくると、ヘッベルはホロフェルネス像を通して、封建的支配勢力・ブルジョアジーとプロレタリアートとの狭間で、不安・絶望と、自信・攻撃性の間を揺れ動く孤独で利己的な教養市民層・中間層の意識とその荒廃

- ・破滅の危険性を暴いたといえるのではないか。

ユーディットもホロフェルネスもいずれも民衆蔑視のエゴイストという点では歪んだ人格の持ち主で、決してりっぱな人間ではないし、尊敬すべき英雄でもない。これに比べれば、冒頭で提起したユーディットの2つの悲劇のうちの殺害時に神を失念していた方は二義的な要因にすぎないし、もう一方の、神と自然の秩序の板挟みはそもそも存在しなかつたため悲劇の原因とはなりえない。民衆蔑視のエゴイストという点に彼らの破滅の本質的原因があるのである。そこにはまた女性についてのヘッベルの保守的倫理観と、時代の危機に対して連帯を拒否し、利己主義に徹しようとする誤った政治的立場が強く反映している。2人の主人公の生きざまはこのようなヘッベルの思想の弱点と限界を暴露しているのである。

注

テキストは Friedrich Hebbel Werke. Hrsg. von Gerhard Fricke, Werner Keller und Karl Pörnbacker. 5 Bde. München (Carl Hanser Verlag) 1963-67を使用（以下H. W.と略す）。尚、日記については日記番号を記す（以下T.と略す）。

- (1) T. 1989.
- (2) T. 1989.
- (3) T. 1872.
- (4) T. 1872.
- (5) In: Mein Wort über das Drama. H. W. Bd. 3, S. 554.
- (6) T. 1011.
- (7) T. 1958.
- (8) H.W. Bd. 1, S. 36.
- (9) ibid., S. 17.
- (10) ibid., S. 33.
- (11) ibid., S. 50.
- (12) 聖書外典でユーディットは「今やあなたがたは全能の主をためしていますが、いつまでたっても何一つわからないでしょう。」（土岐健二・訳『聖書外典偽典第一巻 旧約外典 I』、教文館、1975年4月、275頁。）と述べ、作品のユーディットは「あなたは主に主が歩むべき道を指図しようと/orするのですか。」（Bd. 1, S. 37.）と述べ、いずれも全能の神の行為は人間の知恵では推し量ることのできないものだから人間は無条件にそれに従わなければならない、と考えている点では共通している。
- (13) H.W. Bd. 1, S. 19.
- (14) ibid., S. 23.
- (15) ibid., S. 23.
- (16) ibid., S. 24.
- (17) B. v. Wiese も「本当に神が人間を介して己の心を伝えているのか、それとも単に人間がいつのまにか衝動的に高まってくる自分自身の願望を神の意向と解釈しているだけで、かように妄想に基づいて誤解しているだけなのかはもはやわからない」と述べている。

- Wiese, Benno von: Deutsche Tragödie von Lessing bis Hebbel. Hamburg 1973. S. 576.
- (18) H.W. Bd. 1, S. 29.
- (19) ibid., S. 52.
- (20) 前掲書283頁。
- (21) H. Frisch も「ユーディットはそれと知らず実際將軍の男性的な力の虜になり、民を裏切ってしまった」と述べている。
- Frisch, Helga: Symbolik und Tragik in Hebbels Dramen. 2. Aufl. Bonn 1963. S. 41.
- (22) H. W. Bd. 1, S. 73.
- (23) ibid., S. 74.
- (24) ibid., S. 54.
- (25) ibid., S. 61.
- (26) W. Ritter も「ホロフェルネスはユーディットを交換可能な対象として扱う」と述べており、ホロフェルネスがユーディットの人間としての人格を認めていないことを強調している。
- Ritter, Wolfgang: Hebbels Psychologie und dramatische Charaktergestaltung. Marburg 1973. S. 113.
- (27) この場合には、神の使命放棄と民を見捨てることで、ユーディットは神に対しては罪を犯すが、自然の秩序には反しない。
- (28) H. W. Bd. 1, S. 62.
- (29) ibid., S. 62.
- (30) 前掲書288頁。
- (31) H.W. Bd. 1, S. 64.
- (32) ibid., S. 66.
- (33) ibid., S. 66.
- (34) ibid., S. 64.
- (35) T. 1958.
- (36) T. 1011.
- (37) H. W. Bd. 1, S. 48.
- (38) ibid., S. 11.
- (39) ibid., S. 13.
- (40) ibid., S. 15.
- (41) ネブカドネザルに対するホロフェルネスの軽蔑に関しては、H. Kaiser も「ホロフェルネスがネブカドネザルを軽蔑する」のは自己神格化の「意志をネブカドネザルは自分1人の力では実現できないから」であると述べている。
- Kaiser, Herbert: Friedrich Hebbel. Geschichtliche Interpretation des dramatischen Werks. München 1983. S. 19.
- (42) H.W. Bd. 1, S. 60.
- (43) ibid., S. 61.
- (44) W. Wittkowski も「相応しい地位が拒まれていることへの怒り、ネブカドネザルに対する憎しみと怒りという形でうさを晴らす無力な怒り、がホロフェルネスを駆り立てる」と述べている。
- Wittkowski, Wolfgang: Hebbels „Judith“. In: Hebbel in neuer Sicht. Hrsg. Hermut Kreuzer. Stuttgart 1963. S. 169f.
- (45) H.W. Bd. 1, S. 61.
- (46) ibid., S. 13.
- (47) ibid., S. 17.

- (48) ibid., S. 12.
- (49) H. Reinhardt も「ホロフェルネスは己の内奥の自我を依然として他者にとては不可解で、〔・・・〕神のごとく謎めいて恐ろしいものにしておこうとする」と述べている。
Reinhardt, Hartmut: *Apologie der Tragödie. Studien zur Dramatik Friedrich Hebbels*. Tübingen 1989.
S. 138.
- (50) Sadger, Isidor: „Judith“. In: *Wege der Forschung: Friedrich Hebbel*. Bd. 642. Darmstadt 1989.
S. 103.
- (51) T. 1611.